形容詞の連用用法と連体用法

孫　琦

1．形容詞の連用用法と連体用法をめぐる問題

ある種の形容詞連用修飾構造においては、連用修飾成分を対象名詞にかかる連体修飾成分の形にかえても実質的な意味が変わらない、という場合がある。この場合の名詞は形容詞の意味上の修飾対象となる。変化動詞文については、奥津敬一郎1995-1997の分析が詳しい。本稿は、次の例(1)のような、日本語形容詞のいわゆる状態修飾、つまり動きや現象の主体あるいは対象の外的状態を形容する用法の場合について、修飾語となる形容詞と被修飾語となる動詞の種類及び意味的なかかわり、そして連用用法と連体用法の対応について考察する。

(1) 風が冷たく小屋の中を吹きぬけていました。時刻は真夜中というよりは、もう明け方近いころでした。(絵の)

(1’) 冷たい風が小屋の中を吹きぬけていました。時刻は真夜中というよりは、もう明け方近いころでした。

形容詞連用用法の中に、動詞の表す動きの様子や程度について修飾するのではなく、動作の主体あるいは対象の状態について意味的にかかるタイプがある。日本語に関する代表的な研究として新川忠1979、ソーントン1983、矢澤真人1983がある。

新川忠1979では、副詞と動詞の組み合わせの中に、結果規定的なむすびつきでは、次の例のように、動詞は名詞をかざっているが、変化ではなく、状態を表していて、いわば形容詞化しているといってよいものがあるとする。このような場合、かざりとかざられとのあいだに、原因・結果というむすびつきがなくなっている。また、動詞が「している」の形で状態を表している場合でも、かざりとかざられのあいだには原因・結果のむすびつきは失われ

ている。「小さくととのった横顔」「やわらかくひきしまったおとがいのかかり」「かたくつきだしたあごのあたり」などの例が挙げられている（新川1979, p. 186)。新川1979ではこの場合の形容詞と動詞の関係は原因・結果の結びつきではないと指摘しながら、結果規定的なむすびつきという分類の中に入れている。

ソーントン1983は、形容詞連用形のいわゆる副詞的用法を、「しかたの機能」「結果の機能」「内容の機能」「並列の機能」の四つに分類し、「色を表す形容詞が動作を表す動詞と結びつくと、より主観的な描写ができる。このような形容詞は動詞を意味的に修飾しているより、対象の名詞の状態を述べているようである。」(p. 67) と指摘している。また、「並列の機能」については、「並列的と言ってもそれらの形容詞と動詞との関係は、かなり複雑である。どういう形容詞・動詞の組み合わせが許されるかに対しては、文化的要素によるかなり厳しい制限が働くようだ。」として、「目が大きく澄んでいる」「手が細くくろずんでいて」「桶の水は薄白くよどんでいる」「顔は黄色くむくんで」などの用例が挙げられている（ソーントン1983, p. 74)。

このような形容詞と動詞の組み合わせは、互いの意味は並列的であるといえるのだろうか。そして、単に文化的な要素による厳しい制限が働くと言っているが、それはどのような制限なのかは具体的に挙げていない。このような問題を解決するため、形容詞の意味・形容詞が修飾する動詞の意味特徴・構文的特徴の三つの要素を総合的に考えて考察していく。分析の際に矢澤真人1983からヒントを得た。矢澤1983は、動作・作用の最中に現れるモノのサマを示す修飾＝被修飾の関係構成の型を「状況相修飾」と呼び、動作・作用の結果に現れるモノのサマを示す「結果相修飾」と区別している。この両者をまとめて「状態相修飾」と呼び、以下のように述べている。

⑪a　白ク　輝ク　夜明ケノ海
　b　白ク、輝ク　夜明ケノ海
　c　輝ク　白イ　夜明ケノ海
　d　白イ　輝ク　夜明ケノ海

⑪aは「輝ク」ことによって「夜明ケノ海」に「白イ」という情態が付

与されることが表わされているのに対し、⑪b～dは、「白イ」という状態が「夜明ケノ海」に元々（「輝ク」ということとは別に）付与されていることが表わされているのである。

（矢澤真人1983, p. 32）

形容詞連用形が動詞を修飾する際の形容詞と動詞の意味関係と、形容詞連体形の場合との相違についての以上の論述を踏まえて、本稿は形容詞の連用と連体における構文的特徴及び修飾効果の違いに注目する。

2．考察方法

先行研究を踏まえて、日本語の形容詞の状態修飾用法を対象とし、実例に基づき考察していく。本来ものの静的な性質を表す属性形容詞が動詞と結びつき、意味的には主体あるいは対象の状態を表す機能と、形容詞の連体修飾機能との間に、どのような意味的構文的違いがあるかを明らかにする必要がある。

形容詞と動詞の組み合わせは、次のような修飾パターンに分類できる。

①結果修飾：動きが実現することによって、その結果における主体や対象の状態を述べる場合。

②様態修飾：動きが実現するにあたって、その動きのあり方（激しさ・力の強さ・早さなど）を述べる場合。

③程度修飾：動きが実現するにあたって、その動きの程度的あり方を述べる場合。

④内的状態についての修飾：主体の心的状態（心理・感情・態度など）のあり様を述べる場合。

⑤外的状態についての修飾：主体あるいは対象の外面的状態（色彩・形状・状況）のあり様を述べる場合。

本稿の考察対象は、形容詞の意味が動詞の表す動きについて修飾する用法

(①②③) 及び主体の心的状態を述べる用法 (④) 以外の、動きや現象の主体あるいは対象の外的状態を形容する用法 (⑤) に限定する。矢澤真人1983のいう「状況相修飾」に相当するが、本稿ではこれを「状態修飾」と呼ぶ。このような場合、形容詞の連用用法が連体用法に変換できることが多い。

前述の例(1)は、風が小屋の中を吹き抜けるときに感じた冷たさを主観的に述べているのに対し、(1')は、風の属性として冷たいというように客観的に描写しているといえよう。このように連体用法に変換しても、文の実質的意味がほぼ変わらない場合と、次の(2)のような連体用法に変換できない場合がある。

(2) しかし、自分は、或る日の放課後、たしか初夏の頃の事でした、夕立ちが白く降って、生徒たちは帰宅に困っていたようでしたが (人間)

(2') しかし、自分は、或る日の放課後、たしか初夏の頃の事でした、白い夕立ちが降って、生徒たちは帰宅に困っていたようでしたが

(2)は、激しく降る夕立があたり一面を白く染まった状況を述べている。夕立が本来備えている性質として「白さ」というものがなく、この場合は夕立が降ることによって辺りが白く見えるということなので、(2')は非文となる。

「状態修飾」は形容詞の属性的意味が対象名詞の状態について修飾していることから、連体修飾に変換することは基本的に可能であると考えられているが、変化不可能の場合においては、形容詞と動詞が意味的にどのようにかかわっているのか、さらに連用修飾構文全体の意味から分析しなければならない。

以下では、連用と連体の対応が見られる形容詞の「状態修飾」を取り上げ、特にこの修飾パターンに多く現れる「温度形容詞」と「色彩形容詞」を対象に考察を行う。本来ものの静的な属性を表す「温度形容詞」と「色彩形容詞」は動詞にかかり、意味の抽象化ができず、動作の対象である名詞の状態について意味的にかかる。被修飾語の動詞にはどのようなものがあるかをまず実例から採取した。

用例採取に使用した資料を以下に挙げておく。

『新潮文庫の100冊』CD-ROM／『明治の文豪』CD-ROM

青空文庫http://www.aozora.gr.jp／『感覚表現辞典』

3．修飾語と被修飾語の意味関係

連用修飾語となる形容詞には、「色彩形容詞」の「赤い」「白い」、そして「温度形容詞」の「冷たい」「熱い」を用いる例が多く集まった。被修飾語となる動詞には、状態性動詞や動作性動詞の「ている」形、「た」形、受身形、連用形の中止用法がある。用例採取の結果として、形容詞の最も一般的な動作についての修飾用法の用例に比べて数は非常に少ないが、「赤く」35例、「白く」28例、「熱く」12例、「冷たく」27例がそれぞれ集められた。

四つの基本的属性形容詞が用いられた用例から、どのような動詞にかかって、どのような対象の状態について修飾しているか、さらに連体用法への変換が可能かどうかを考察した。なお、連体用法への変換が可能かどうかというのは、表層的に変形が可能か否かということではなく、あくまでも連用修飾成分を対象名詞にかかる連体修飾成分の形にかえても実質的な意味が変わらない、ということを指す。

採取した実例を観察することによって、修飾語である形容詞と被修飾語である動詞の意味関係には、次の二つのタイプがあることがわかった。

Ⅰ ［Ｖする最中の状態において、ＮがＡ］

(3) 縁先にすすきの穂が白く揺れていて、又、いい月だった。（太郎）

(4) たいまつの火の粉は赤く散り、大熊星は見えません。（柳沢）

(5) おぬいは老境に来たのを思わせるような母の後姿を見つめながら、これを思いだすと、涙がまたもや眼頭から熱く流れだしてきた。（星座）

(6) 庭が広くて、ガラス窓が十二月の風に磨いたように冷たく光っていた。（放浪）

Ⅱ ［Vすることによって、NがA］

(7) というのは、その頬は熱くほてり、頭は深く深く垂れ下がっていたからです！（絵の）

(8) ストーブは熱く、見上げた母の横顔が赤く照らされていた。（うた）

(9) 海は幾つかの小さな島をその沖あいに点在させて、うす陽をうけて針のように光り、浜を噛む波が白く泡だっていました。（沈黙）

(10) 秋になりました。私の唇も冷たく凍ってゆきます。（放浪）

タイプⅠは、形容詞の表す状態が出現した、あるいは存在しているのは、必ずしも動詞の表す現象に起因するものではない場合である。「揺れる」と「白い」、「動く」と「赤い」、「光る」と「冷たい」のように、被修飾語の動詞と修飾語の形容詞の間に、意味の必然的関連性がなく、動詞の語彙的意味の内部に備わっている性質からは色彩や温度の意味が引き出せない。したがって、主体や客体となる名詞は動詞の修飾対象であるよりも、形容詞の表す状態の対象であるため、連体修飾に変換しても意味上変わらないのである。

それに対して、タイプⅡは、動詞の表す現象や状態が生起することによって、形容詞の表す状態が出現した場合である。「ほてる」と「熱い」、「照らす」と「赤い」、「泡立つ」と「白い」、「凍る」と「冷たい」のように、動詞と形容詞の間になんらかの意味的関連性がみられ、被修飾語となる動詞は、動作性動詞ではなく、いわゆる状態動詞が一般的である。したがって、タイプⅡの場合は形容詞の表す状態は対象となる名詞に本来備わっている性質ではないため、連体修飾に変換することができないのである。

ただし、タイプⅠの場合でも、次の(11)～(13)のように、そのままでは連体修飾に変換しにくいもの、あるいは変換するとやや不自然な言い方になるものがある。

(11) 汽鑵車の烟は火になっていた。反射をうけた火夫が赤く動いていた。（檸檬）

(12) 外は、山稜にたち切られた空に星が冷たくまたたいて、風はないが非

常に寒い。(登山)

(13) 彼は自分の前に置かれた紅茶茶碗の底に冷たく浮いている檸檬の一切を除けるようにしてその余りを残りなく啜った。(明暗)

「赤い火夫」「冷たい星」はいえないし、「冷たい檸檬」は別の意味内容に変わってしまう。なぜこのように、形容詞が対象の名詞を連体修飾できないかは、日本語の形容詞が連体修飾で用いられる場合の特徴とかかわっている。「反射をうけた火夫が赤く動いていた」の「赤く」は「火夫が動いていた」時の様態で、一時的な印象を描写しているのである。一方、形容詞の連体修飾はふつう持続した状態あるいは固定された属性を表し、他と区別する機能を持っているため、「若い火夫」があっても、「赤い火夫」はいえない。つまり色の「赤い」は「火夫」の属性になり得ないためである。「冷たい星」と「冷たい檸檬」も同様であるが、ただし文学作品のなかで比喩表現として、まったく許されないわけではないのである。

4. 被修飾語となる動詞

ソーントン1983は、ここでいう「状態修飾」のような、「並列機能」と呼ばれる形容詞と動詞の組み合わせについて、どういう形容詞・動詞の組み合わせが許されるかに対しては、文化的要素によるかなり厳しい制限が働くようだと、述べている。

「赤く」に修飾される動詞には、「光る、燃える、動く」のほか、「うるむ、映える、照らし出す、腫れる」などの「赤い」状態をもたらす現象や動きを表す動詞が多く見られる。「白く」に修飾される動詞は最も用例数が多く、「霞む」「ふやける」「乾く」「澱む」のような状態動詞や、「落ちてくる」「崩れる」「傾く」のような動作性動詞などさまざまな動詞が被修飾語となりうる。「冷たく」に修飾される動詞には、「光る、湿る、吹く、降る、凍る」の例がみられた。「熱く」に修飾される動詞には、「燃える、照らす、ほてる」などの例がみられた。

以上、用例データに基づき、「赤い」「白い」「熱い」「冷たい」の四つの形

容詞を考察の対象とし分析を行った。分析の際に、修飾語となる形容詞、そして被修飾語となる動詞、さらに対象となる名詞の三者の関係を視野にいれ、連用用法と連体用法の関係を検討した。

5．連用と連体の表現的意味の違い

これまで、連用と連体の対応という現象については、文法や意味の上から、その対応の可否について論じてきたが、実際の使用においては、連用と連体が対応している場合でも、文体や表現上にはどのような違いがあるかをさらに追究する必要がある。奥津敬一郎1995-1997を代表とするいわゆる連体と連用の対応という現象に対して、加藤重広2003は語用論の立場から、「楽しく練習した」と「楽しい練習をした」とは実質的には同義とはいえない、と反論を唱えた。また、「ひどく頭痛がする」と「ひどい頭痛がする」のように、連体修飾と連用修飾で意味がかなり近い場合もあるが、会話の中で使われるこれらの例を挙げ、これもやはり全く同義とはいえないとした。語用論からみて、また文体論からみて、連用修飾で用いられる形容詞と連体修飾で用いられる形容詞に構文上の対応が認められても、表現上の意味がまったく同じではないといえよう。次の例文を見てみよう。

(14)=(1) 風が冷たく小屋の中を吹きぬけていました。時刻は真夜中というよりは、もう明け方近いころでした。(絵の)

(14’) 冷たい風が小屋の中を吹きぬけていました。時刻は真夜中というよりは、もう明け方近いころでした。

(15)=(4) たいまつの火の粉は赤く散り、大熊星は見えません。(柳沢)

(15’) たいまつの赤い火の粉は散り、大熊星は見えません。

色彩形容詞や温度形容詞といった典型的な属性形容詞は、基本的にものの静的な属性を表す意味で使われるが、形の上では動詞にかかっても、意味的には対象名詞の表す状態について修飾限定するという働きをする。しかし、やはり連用は連用、連体は連体である。連用で用いられる以上、形容詞はや

はり動詞の表す動きや現象の動的様態を表している。連用は、連用形という形において動詞に寄り添い、動詞のもつ時間的幅や過程といったものを分かち持つ。例(14)の「風が冷たく吹きぬける」は、風が吹きぬけたときに感じる冷たさが感覚的に表現している。そして(15)の「火の粉は赤く散る」は、赤いたいまつの火が四方八方に散っていくという動的なものが感じ取れる。

形容詞が名詞にかかり連体修飾で用いられるときは、物の静的な属性を、客観的に述べているのである。それに対して、形容詞が動詞にかかり、連用修飾で用いられるときは動的な感覚を、あたかも人間がそこにいて感じたように主観的に描写しているのである。つまり、形容詞の連用修飾のもつ表現機能というのは、視覚や聴覚・触覚などを通して、人間が共感できる生き生きとした表現になることである。

6．まとめ

本来ものの静的な性質を表す属性形容詞（「赤い」「白い」「熱い」「冷たい」）が動詞と結びつき、意味的には主体あるいは対象の状態を形容する修飾機能を中心に、修飾語となる形容詞と被修飾語となる動詞の意味的特徴、そして連用修飾構文の文法的特徴の三つの視点を合わせて分析を行った。用例データに基づく考察結果から、形容詞の状態修飾という機能において、構文的特徴からタイプⅠとタイプⅡに分かれることが明らかになった。ものの静的な属性を表す色彩形容詞や温度形容詞が述語動詞にかかる場合、日本語の形容詞はいわゆる状態動詞の表す様態を修飾限定するのが主な働きである。したがって、形容詞と動詞の結合に慣用的なペアが多く、形容詞の表す属性的意味と動詞の表す状態的意味との間、意味的関連性が認められるものが一般的である。

参考文献

奥津敬一郎(1995-1997)「連体即連用？」『日本語学』連載1995/11-1997/9　明治書院

加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房

新川忠(1979)「『副詞と動詞とのくみあわせ』試論」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房

矢澤真人(1983)「状態修飾成分の整理」『日本語と日本文学』3　筑波大学

ロザリンド・ソーントン(1983)「形容詞の連用形のいわゆる副詞的用法」『日本語学』2-10　明治書院

用例出典

『CD-ROM版　新潮文庫の100冊』　新潮社1995

『CD-ROM版　新潮文庫　明治の文豪』　新潮社1997

『感覚表現辞典』中村明　東京堂出版 1995

青空文庫 http://www.aozora.gr.jp

［作品名一覧］

(絵の)『絵のない絵本』アンデルセン（大畑末吉訳）／（人間)『人間失格』太宰治／（うた)『うたかた』吉本ばなな／（沈黙)『沈黙』遠藤周作／（放浪)『放浪記』林芙美子／（檸檬)『檸檬』梶井基次郎／（登山)『登山の朝』辻村伊助／（明暗)『明暗』夏目漱石／（柳沢)『柳沢』宮沢賢治／（太郎)『太郎物語』曽野綾子／（星座)『星座』有島武郎

（そん　き・早稲田大学）